

はだの歴史博物館 令和6年度 企画展

怪異と妖怪の世界

令和6年6月22日(土)～8月18日(日)



餓鬼が憑りついたという旧ヤビツ峠周辺

はじめに

民俗学の分野に「口承文芸（口伝えの話）」というものがあります。昭和62（1987）年に発行された『秦野市史別巻 民俗編』には、「口承文芸」にあたる「昔話・世間話・伝説」およそ400話が掲載されています。

これは市内で約一年間にわたって

採集されたもので、怪異や妖怪にまつわる話も一定の割合を占めています。

今回の企画展では、「夏」という季節にちなんでこれらの話を紹介すると共に、文化振興課浮世絵ギャラリー所蔵の関連浮世絵も紹介し、怪異と妖怪の世界にみなさんをご招待します。

カンスコロガシ



カンスコロガシ

「カンスコロガシ」は、漢字で書くと「罐子転がし」となります。罐子とは茶釜の事で、これがひとりで「がらんがらん」と音を立てて転がっていくという怪異です。

『秦野市史 別巻 民俗編』には、この怪異が2例収録されています。渋沢の峠地区で採集されたものは、夕方に罐子が坂を転がっていくという典型的なものですが、注目されるのは、堀西で採集された話です。

狸が、手足を丸めてころころと転がってきて足元にぶつかり、驚いて持っていたものを落とすとそれを失敬してゆく。これをカンスコロガシと言うのだそうです。

ここで狸が出てきたわけですが、妖怪は狸が化けたものだと言われる事も多く、カンスコロガシも、一部でそのように考えられていたのでしょう。文福茶釜が連想されますね。

ヤビツ峠から秦野清川線を北に進んで1きほどの場所に、「カンスコロバシ沢」という沢がありますが、この

怪異と何か関係があるのかも知れません。

餓鬼道(がきみち)



餓鬼道

「餓鬼道」は旧ヤビツ峠のことで、現在のヤビツ峠から西に500mぐらいの尾根の鞍部に位置しています。

この峠を越える道は、秦野から札掛、津久井を経由して甲州に抜ける近道でしたが、この峠を通る際に急に空腹感を覚え、歩けなくなることがあったそうです。こういった時は握り飯を、後を振り向かずに投げれば空腹感はおさまると言われていました。

この空腹感は餓死者の霊が「餓鬼」になって、これに憑かれたためと考えられ、この峠道を「餓鬼道」と呼ぶようになったといえます。

特定の峠路で空腹感に襲われ動けなくなるという事例は全国にあり、憑くモノを「ひだる神」と呼ぶ例があります。

狐火(きつねっぺ)

ほぼ全国にわたって広く知られた怪異で、『秦野市史 別巻 民俗編』に

は21話が紹介されていて、実際に目撃したという話がほとんどです。

狐火は、秦野地方の方言で「きつねっぺ」、「きつねっぴ」と呼んでいて、たくさん並んで見えることが特徴だとされています。

はじめは1つの灯りであったものが、2つになり、3つになり、10になり、「山すそにずうっときれいに火がつく」などと語られています。狐火が目撃された具体的な場所としては、弘法山が多く挙げられています。

狐火は、狐が人を化かして見せているのであって、その時は、もう狐が自分の足元にいると言われていました。季節に関係なく、天候が崩れる前によく見られるとの話もあります。

深山美人

「丹沢山奥に怪美人出没」これは大正3(1914)年7月22日(水)付けの『横浜貿易新報』4780号に掲載された新聞記事のタイトルです。

帝室林野管理局の職員が塔ノ嶽周辺を視察中、年齢三十代前半の女性が茫然と佇んでいるのに遭遇しました。

驚いて住所氏名を尋ねても返事はなく、再度村人13人で同所に訪れたところ、もはやその姿はなかったといえます。

7年ほど前に中井村(現、中井町)で行方不明になった寺の姉妹があったらしく、秦野方面に向かった形跡があるとかで、そのどちらかではないかという話が地元で持ちきりでした。

しかし、奥深い山中で、女性は何年間も独りで生きながらえるものなのでしょうか？ 真実はもう過去の闇の中です。

ともあれ、この「深山の美人」、当時秦野でも話題沸騰だったようで、明けて大正4年1月2日から6日まで、今の本町三丁目の台町バス停付近にあった「秦野座」で「相州丹沢山の深山の美人の活劇」が「番町皿屋敷」とともに上演されて毎晩大入りだったといえます。



深山美人

道永墓



道永墓

県道 70 号(秦野清川線)を北上し、寺山と落合、名古屋の接する地点となる延沢橋を過ぎた先の三叉路に、左側面に「道永墓」と刻まれた巨石が建っています。

ここには古くから「道永」の墓があると言われていて、夜ごと怪しい火が灯ったり消えたりしていました。

宝蓮寺住職の大蟲(だいちゅう)が、「ここは昔戦場で、亡者の魂が今でもさまよっているのだ」と言って、お経をしっかりと唱え、亡者は成仏し、妖しい火は見られなくなりました。

このことを後世に伝えるため、明和 8(1771)年に建てられたのが「道永墓」の巨石です。

また、大山寺の住職だった良弁(ろうべん)の評判をねたんだ「道永」という諸国修行の僧が、大山寺に放火し逃げてきたのを村人がここでとらえて生き埋めにしたので妖しい火が出るようになったという話も広く伝わっています。

目一つ小僧

12月8日は「シワスヨウカ」といわれ、山から目一つ小僧がやってくる日とされていました。

夕方になると、家々では長い竹竿の先に目カゴを逆さにかぶせて玄関口に立て、カゴの目の多さで目一つ小僧を脅して退散させるためだとされています。

目一つ小僧は悪い行いをした子どもを病気にするため、その名前を帳面に

書いておきますが、その帳面が厚くなり重くて持ち帰れなくなって道祖神に預けます。翌年の1月15日に目一つ小僧が預けた帳面を取りに来ると道祖神は「昨晚の火事で燃えてしまった」と言い、目一つ小僧はあきらめて山に帰ってしまう。こんな話が1月14日の道祖神行事、「団子焼き」に伴って語られていました。

また「シワスヨウカ」の晩に履物を外に出しておく、目一つ小僧に判をおされ、やはり病気になってしまうので家の中にしまい込んだといひます。

雷 獣



『震雷記』の「大山に落た雷獣」

出典：東京大学地震研究所図書館 石本文庫

「雷獣」とは、落雷とともに現れるという幻の獣で、全国各地で目撃例があり、いろいろな書物に記されてきま

した。

江戸時代に後藤光生が編集した『震雷記』という随筆集の冒頭には、明和2(1765)年7月下旬、相模大山に出現した「雷獣」の話が紹介されています。

イタチのような体形をしており、体色はイタチよりも黒かったそうです。

挿図によると、尻尾の形状こそ違え、目から鼻先にかけて白い筋が入っています。このため、ハクビシン説が有力です。

踊宮

慶安2(1649)年に戸川村の地頭になった戸田庄右衛門が、村内の鹿島神社に参詣した時、猟師に追われていた鹿と狐を助けた事がありました。

ある夜、山賊たちが地頭の屋敷を襲おうとすると、鹿島神社から四五人の美女が現れます。美女たちは山賊を地頭の屋敷に案内し、地頭は留守と告げて、美酒とごちそうをふるまって踊りを披露します。山賊たちは大喜びで、飲めや歌えやの大騒ぎ。

山賊たちが泥酔したころ、奥座敷の扉が開かれると山と積んだ黄金の箱。これを自由に持ち帰ってよいと言われた山賊たちは、喜びながらもおぼつかない足取りで重い箱を背負って屋敷を立ち去ろうとします。

そこにやってきたのは、かねてから山賊を捕えようとしていた捕方の一団で、彼らに囲まれた山賊たちはあわてふためき全員古池に転落してしまいます。

翌朝、変わり果てた山賊たちの姿を見た村人たちは、これは地頭に助けられた鹿と狐の恩返しだと語り合いました。

古塚之碑



古塚之碑

「古塚之碑」は、秦野市柳川346番地の道路に面した一角に建てられています。

この碑は昭和6(1931)年に熊沢脩一さんによって建碑されていますが、この地には、北条氏康の部下、遠山氏の館があり、同氏がこの地を退去する時、付近の畑に銭及び朱を埋めたとの言い伝えがありました。

熊澤さんはこの場所を知りたくて「靈感作用実験者」としても知られる、鈴木糧食研究所の鈴木忠治郎氏に相談したところ、「鈴木エツ子」さんの靈感によって「柳川346番地」がその場所であるとの回答を得たのでした。

このように遠く離れたところのものを探し当てる能力はいわゆる「千里眼」に類するものであると思われています。

鈴木忠治郎さんは実業家であるとともに発明家で、470件を超える特許

